

〈原 著〉

児童期の連帯についての発達心理学的考察

—「蠅の王」と「芽むしり、仔撃ち」をめぐって—

山岸 明子*

A study of solidarity in childhood from the viewpoint of
developmental psychology through analyzing
“Lord of the flies” and “Nip the buds, shoot the kids”

Akiko YAMAGISHI*

Abstract

The purpose of this study was to examine the condition of solidarity in childhood by analyzing typical examples where children either could form solidarity or couldn't. We analyzed two contrasting novels describing boys' solidarity, William Golding's "Lord of the flies" and Kenzaburo Oe's "Nip the buds, shoot the kids". Results showed that the following six conditions had effects on forming solidarity; as to tasks which boys worked on, 1) cognitive adequacy of tasks, 2) degree of task sharing, 3) clarity of results, 4) degree of necessity for cooperation, and as to boys' endowments, 5) ego maturity of group members, especially their leader, and 6) experience of independence and strength of orientation toward it. It was also considered how adults can support them to form solidarity in difficult conditions.

Key words: solidarity, childhood, developmental psychology

1. はじめに

子どもが一人で物事を達成するのではなく、集団で協力して共通の目標を目指して活動し、その中で集団との一体感を持ち、他の成員と自発的で親密な関係をもつことは、社会性の発達の重要な側面である。そのような「共通の目標を持って活動し、成果を共有することによりもたれる集団への一体感や結束」を本稿では「連帯感」とするが、そのような「連帯」や「連帯感」を発達心理学や教育心理学の立場から実証的・理論的に検討する試みはほとんどなされていない〈注1〉。社会心

理学の領域では「集団意識」という形での研究はあるが、発達の・教育的な観点はないし、物事を共に達成することに伴う連帯とはいくらか異なると思われる。一方、Eriksonの自我発達理論³⁾における児童期は上述の連帯感との関連が深いと考えられる。しかしEriksonの記述は「生産性対劣等感」が主で、それと関連して生じる連帯感についてはほとんど触れられていない³⁾。また発達心理学においては、他者と自由で平等・相互的な関係を作ること Piaget や Kohlberg の道徳性発達理論¹⁰⁾¹⁴⁾の中心的な問題であるし (Kohlberg は後期の「公正な共同体」に関する研究では、集団意識や集団の発達段階について言及している¹⁶⁾)、共感性の発達については Hoffman⁸⁾ や Eisenberg²⁾等によって多くの研究がなされている

* 順天堂大学医療看護学部・教授 (心理学)
School of Health Care and Nursing, Juntendo University

が、そのことと「連帯感」を関連させた考察はほとんどなされておらず、何が連帯を可能にするのかを発達心理学や教育心理学の観点から分析する研究もまだ見られない。

本稿では、児童期の連帯について、どのような状況下においてそれが可能になるのか、その条件についての考察を行う。なお「児童期」とは6才から12才くらいの時期で、多くの国における学校制度ともほぼ一致していることから学童期とも呼ばれる時期である。考察の対象とするのは、少年達〈注2〉の連帯を描いた対照的な2つの小説、William Goldingの「蠅の王」⁹⁾と大江健三郎の「芽むしり、仔撃ち」¹²⁾である。どちらの少年たちも突然大人から切り離されて自分たちだけで生きていくことを課されるが、一方は連帯して豊かな関係を築き、他方は連帯できずに殺伐とした闘争になっていく。小説は事実ではなく、作家の考えや直観に基づくものであるし、地理的・文化的背景が異なる小説であるが、人間についての深い洞察をもつ二人のノーベル賞作家が描いた少年をめぐる状況には、連帯を可能にする条件は何かの問題が内在しており、児童期の自我発達や連帯感を規定する認知的・社会的条件を導き出すことが可能なため、「連帯が可能だった」「不可能だった」典型的な事例として取り上げて分析を行う。

本稿では、まず児童期になぜ連帯感が可能になるのか、その認知的・社会的基盤について述べてから、2つの小説における少年達をめぐる状況を分析し、何がどう違っていったのか、どのような状況に置かれ、それが発達的に見てどのような意味をもっていたためにそうなったのかという観点から検討する。更に少年達がむずかしい状況でも連帯できるようにするために、大人はどのように援助していけるのかを、連帯を規定する認知的・社会的条件と関連させながら考察する。

2. 児童期の連帯感とその認知的・社会的基盤

Eriksonによれば児童期の発達課題は「生産性対劣等感」の危機の克服とされている²⁾。児童期になると子ども達は学校に入り、知識の吸収や技

術の習得を目指すようになる。幼児期のように個人的な目標を追って主観的な満足を求めるのではなく、社会で認められた目標、誰もが認めるような客観的な成果を目指す活動—知的な学習やスポーツ、お稽古事等にエネルギーを注ぐようになる。その背後にあるのは、1)ものごとを客観的にとらえられるようになるという認知発達(具体的操作)と2)家庭中心だった子どもが、学校という集団に所属するようになるという、幼児期から児童期におこる大きな2つの発達の変化であると考えられる。以下にこの2つがいかに連帯感を可能にするのかについて述べてみる。

自他の行動を自分の視点からだけではなく客観的に見ることが可能になった子ども達は、客観的な成果＝「生産性」があったと認知した時、達成感や自己効力感・有能感を感じるようになる。Banduraは自分の行動に対して成果が感じられる時にもたれる「自分がやったのだ」という感覚を自己効力感とした¹⁾が、児童期になると、それを経験するためには客観的な成果、誰もが認めるような成果を得ることが必要になると考えられる。(山岸は幼児期には客観的な成果ではなく、自分にとって成果があると感じられれば「自分がやった」という充実感が感じられることを論じている²⁰⁾。そして努力しても思うような成果が得られない時、彼らは無力感や劣等感をもつようになると考えられる³⁾13)。

遊びに関しても、幼児期には自分たちだけの世界を作る主観的なごっこ遊びが中心であったが¹⁵⁾、児童期には共通の基準に基づき客観的な成果を競うような集団遊びが中心になる。目指す目標を他者と共有し、行動の成果も客観的にとらえられるようになると、複数の他者との「協力・競争」という新しい関係がもたれるようになる。そして児童期後期にはこの時期特有の「ギャング集団」が形成される。彼らは10才頃になると、排他的で結束の強い集団を構成し、リーダーを中心に自分たちでルールを作り、ルールに基づいて組織的な集団遊びに没頭する。彼らは協力して目標実現を目指し、客観的な成果をめぐる一致団結して他の集団と競い、成果を共有して「我々がやっ

たのだ」という集団としての生産性を経験する。それが適切な形で経験されると、集団への一体感と集団の一員として集団目標を実現しようとする気持ちが更に強まり、また成員間に自由で平等な関係が形成されると考えられる。

一方共通の基準に基づいて客観的な成果を競う時、他者と比較することにより、優劣意識も生じる。社会的比較を発達的に検討した研究によると、社会的比較は4才から既に見られるが、社会的比較に基づいて自分の能力を評価するのは小学4年以降であることが示されている¹⁸⁾。したがって児童期の子ども達は、生産性課題(劣等感にめげず客観的な成果を目指して一生懸命励むという児童期の課題)に取り組み、その達成により「自分がやったのだ」という個人的な達成感と共に、他者よりできるという自己評価をもち優越性を感じたりするようになる。それが重要な場面で繰り返され、片方が自分の優越性を誇示する場合は、現実的な強者-弱者の関係ができてしまうこともある。そのような事態は集団での達成場面で起こる場合もあり、集団による達成であっても「われわれ」の達成ではなく、力ある個人の達成と認知され、時に「個の拡大欲求」を強めて、力をもって他者を支配する行動につながることもある。児童期の生産性課題は両刃の剣であり、連帯感によってもたれる平等・相互的な関係だけでなく、競

争的で抑圧的な人間関係を生み出し、一方的な支配・被支配の関係をもたらす場合もあると考えられる。

以上のように、児童期には認知的・社会的発達に伴って生産性課題がもたれるようになり、それが協力・競争という新しい関係の中で達成されることを通して、連帯感ももたれると考えられる(cf. 図1)。但しそのような児童期の状況は場合によっては競争的で抑圧的な人間関係を生み出すことも考えられる。どのような状況で連帯が可能になり、どのような状況ではそれが不可能なのかについて、少年達が携わっている生産性課題や協力・競争のあり方がどうなのかの分析を中心に以下に考察を行う。

3. 少年たちはなぜ連帯できなかったのか—「蠅の王」の場合—

3.1 「蠅の王」の少年たち

「蠅の王」は、イギリスからの疎開中に南太平洋の孤島に不時着した少年たちの物語である。彼らは大人が誰もいない世界で、救助を待ちながら自分たちだけで生きていくことになる。少年達は隊長を選び、民主的な集会を開いて自分たちがやるべきことやそのために必要な規則を決める。皆で協力して理性的秩序を守り、よい集団を作ろうという意志はほら貝にたくされ、ほら貝をもつ隊

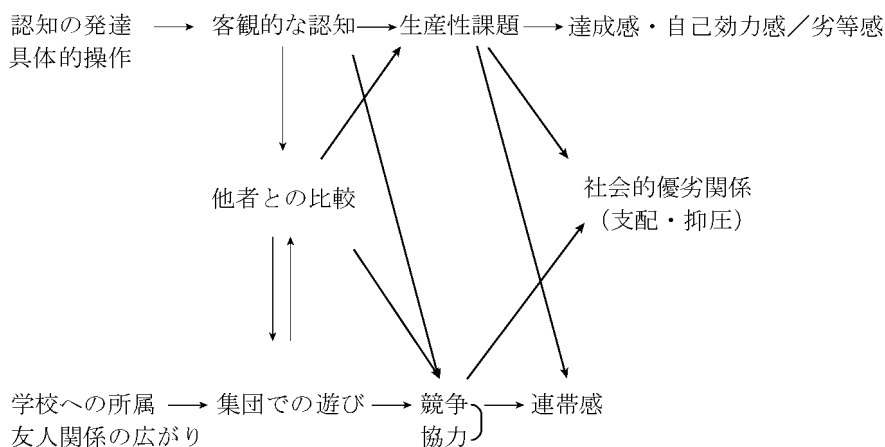


図1 児童期の連帯感の認知的・社会的基盤

長ラーフを中心に少年たちの自治の生活が始まる。しかし平和で理性にもとづく生活は徐々に壊されていく。ジャックという少年がラーフと対立し、時と共にその対立は先鋭化し、やがて集団は分裂し殺伐で陰惨な闘争になっていく。

少年たちは三つのグループに分けることができる。第一は、リーダーの資質を備え隊長に選ばれたラーフと、最後までラーフと共にあってほら貝をもったまま殺されてしまうピギー、寡黙だが深い洞察力をもつサイモン（彼も殺されてしまう）のグループ。彼らは皆にとってどうすることが一番いいことなのかを理性的、長期的に考えることができる。彼らは皆が快適に生きていくための方略（例えば小屋を建てること）を提案し、その実現化のために一生懸命かかわる。彼らは、救助されるために火を守り、煙を出し続けることを最も重要と考えている。その大変な仕事を継続させるためには皆が協力することが必要である。彼らにとって他者とは協力して共通の目標に向かう者である。

彼らはそのように認知的に優れた力を持っているが、一方でそれまでただ大人に従って生きてきた少年たちである。彼らは困難な事態になると「大人ならどうするだろうか」と考え、大人の指導を望み、自分たちの状態を嘆いている。特にピギーは何かというと「ぼくのおばさんがね」と言い、またすぐにぜんそくがでる肉体的にも精神的にもひよわな少年である。またサイモンはコミュニケーション能力が欠けており、ラーフも肝心な時に自分の考えをうまく伝ええない。認知的には高水準だが、社会的発達や自我発達は必ずしも充分ではない少年達である。

第二のグループの中心はジャックである。彼は初めから他者を力で支配しようとする傾向を示していたが、その傾向はかれの能力や状況的要因によって強められ、民主的な第一グループと対立していく。彼はナイフをもち、狩猟の才能もっていた。彼の関心とエネルギーは豚を狩ることに向けられる。彼にとって狩りは、確かな成果を手にするという児童期の生産性達成の最適な機会であった。彼はそれをほとんど独力で、他者の助けな

しでやりとげることができた。豚を狩った喜びは皆で共有するものではなく、彼の個人的なものである。しかしその結果は皆に分配された。彼は果物しか食べるものがない少年たちに肉を提供した。彼にとって他者は連帯してことにあたる存在ではなく、自分の力を誇示し、成果を恵んであげる存在にすぎなかった。そして彼の行為が集団の基本的な欲求を充足させることから、ジャックは力をもつようになっていく。しかし彼は現在の楽しさを追うばかりで、ラーフたちのような長期的視点をもっていない。一度ジャックが火の番の少年を狩りに動員した時に船が現われ、少年たちは救助される機会を逃してしまうが、ジャックはそのことを悔むことなく、ラーフに文句をいわれたことに腹をたてているだけである。

第三のグループはその他大勢の少年たちである。彼らは大人という権威者がおらず何も現実的な力で強制されない世界で、欲求のままに生きている。彼らは勿論救助されることを望んでいるが、そのためにつまらない仕事をするより楽しく過ごしたいと思っている。その島は暖かく、恵まれた自然条件の中にある。少年たちは昼間は何の脅威もなく楽しく過ごすことができる。そんな彼らにラーフは本来の目的を達成するために、面白くないしまだ何の成果も得られていないことを地味に忍耐強くやることを要求する。一方ジャックは「豚を狩る」という明確な生産性を示す行為を行ない、それに伴う荒々しい熱狂と興奮を集団にもちこむ。しかもおいしい肉を与えられた彼らは、段々本来の目的を忘れ、その時々快樂に魅かれ、ジャックの圧政を許容するようになっていく。

3.2 連帯を不可能にした状況的、発達の要因

平和で民主的な自治が崩れ、理性でなく力が支配する集団になってしまった原因は何だったのだろうか。ラーフとピギーはその原因をジャックに求めているが、しかし集団を変えていったのはジャックだけでなく、ジャックを受け入れラーフを受け入れなかった少年たちでもある。著者は集団が悪しきものに变质してしまった原因は「蠅の王」であり、「蠅の王」とは我々の内面に巣くって

る悪、人間の内なる暗黒であると述べている。しかしこの物語が悲惨な結果になってしまう原因は、人間性の悪だけにあるのではなく、少年たちをめぐる状況にもあるように思われる。彼らをめぐる状況は、児童期にある彼らが自分たちの力だけで連帯するには困難なものであった。自分たちが選んだリーダーが目指す意図を十分理解することができず、連帯の動機づけをもてない時、生産性を追求する少年たちは、別のリーダーを求めざるをえなかったのである。

少年たちは、孤島に不時着したという強烈な共有体験もっており、そもそも共通の目標に向かって連帯することが容易な状況にあった。彼らが共通にもっている目標、欲求は1)救助されること、2)救助されるまでの期間を楽しく過ごすこと、3)恐ろしいこと、不快なことから逃れることである。そしてそのためには、自分たちしかいない孤島で何とか協力して仲よくやっという連帯感や自治への志向を強くもっていた。

ところが自分が置かれた状況の認知、現状に対する感じ方の違いや、目標実現を目指す行動に対するフィードバックの与えられ方から、3つの目標の重みがそれぞれ微妙に異なってくる。ラーフは夜のため、また雨が降った時のために小屋を作ることを提案するが、ほとんどの者は協力的ではない。それは雨も寒さもなく気持ちのよい昼間には小屋を作ることの必然性が感じられないからである。状況を長期的、多角的にみる能力がない少年たちは、遊ぶ楽しさを我慢してまで一生懸命働く気持ちにはならない。

彼らにとって本来一番重要な目標は、救助されることである。全員がそのことを強く願い、目標実現のために協力している。しかし良好な自然条件のためにそれはそれ程切実なものにはならない。一方3)は皆が共に望んでいることであり続け、このことに関してのみ彼ら是对立をはらみつつも協力してことにあたっていた。また一時の楽しさを求めるのでなく救助されたいという欲求を強める契機となりうるものでもあった。しかし少年たちがおそれているものは、はっきりとした姿を見せないため、わけのわからない獣、超自然的

なものとしてとらえられてしまい、結局連帯を強めるものにはならなかった。そしてジャックが豚の頭を供えることによって恐怖がある程度おさめられてしまうと、ラーフとジャックの決裂は決定的になるのである。彼らは孤島に不時着した仲間という強烈な共有体験をもちながら、連帯するための確固とした共有目標をもてなくなってしまう。

救助されることが皆の強い目標にならなかったもう一つの理由は、そのための行為(火を炊いて煙を出し続けること)が努力を要し、しかもそれに対する見返り(フィードバック)が全くないということにある。少年たちは明確な目標があり、努力に応じたフィードバックが返ってくることには勤勉に取り組むことができる。少年は社会や文化の要請にそった生産的な事柄に熱心に取り組むことが可能であるが、そのためには彼が何らかの意味で生産的になりつつあるというフィードバックを与えられることが必要である。

しかし救助のために火を燃やすことは何の成果ももたらさない。四六時中火を絶やさないことは大変な仕事であるが、その努力は全く報われない。いくら頑張っても船が偶然そこを通らなければその頑張りも全く意味をもたない。日々の努力が生産性と結びつかず、それにもかかわらず努力は続けられねばならないし、一時の怠りが非生産性を招くという非常に厳しい作業なのである。未来に向かって時間的展望¹⁷⁾をもち未来に規定された現在を生きる青年たちならば、非生産的な現在に耐えることができたかもしれない。また成果がないにもかかわらず取り組んでいくことを励まし、別の次元でのフィードバックを与えてくれる大人の支えがあれば、少年たちは本来の目的を持ち続けたかもしれない。しかし彼らは少年にすぎず、彼らを取り巻く状況に彼らを支えるものはなかったのである。

それに比べ豚を狩ることは、一生懸命努力して生産性を得るという児童期の発達課題そのものであり、果敢な挑戦は大きなフィードバックをもたらす。大きなすばらしい獲物を射止めたジャックは最高の充実感を感じるし、荒々しい格闘の跡を体中に残し、興奮さめやらぬジャックからその体

験談を聞く少年たちも生産性を疑似体験している。そして豚狩りは少年を惹きつける生産性と結びついた課題でありながら、ジャックにとっては協力を要するものではなかった。協力しなければ課題が達成されない時、少年たちは自らが求めるもの（生産性）のために他者と協力せざるをえない。しかしジャックは優れた能力をもっていたためにほぼ独力で豚を狩ることができてしまう。二度目の狩りにはジャックを補助する少年たちも加わっているが、ジャックは彼らの貢献を評価しないし、実際その貢献度は低い。ジャック個人の手柄であり「皆でしとめたんだ」というような連帯感とは皆無である。そしてジャックがしとめたものは、皆に分かち与えられる程に多量で、一人でもっていても仕方ないものである。ジャックはそれを皆に分け与えることにより、自分たちに利をもたらしてくれる力ある者と認知されていく。

ラーフは成果はすぐには現われないが長期的に見れば一番本質的な1)の欲求充足を最優先しようとしているリーダーで、一方ジャックは皆の2)の欲求充足を満たしているリーダーである。ジャックはおいしい肉を提供することにより2)の欲求に現実的に応じ、また豚の首を「獣への贈り物」として捧げることにより「おそろしい獣」をある程度遠ざけることができた。一方ラーフに従えば1)の望みはあるものの現実的にはまだ何の成果もなく、2)と3)に関してもラーフはジャックのような具体的な成果は示していない。ジャックは「ぼくのお陰できみたちは肉が食べたんだ。それに、ぼくの狩猟隊のお陰でこれからあの獣からも守ってもらえるはずだ」と誇らしげに言う。それに対しラーフは「それがきみたちの仕事だったんだ」と応じ、ジャックは集団の一つの任務を果たしたにすぎないこと、その成果は集団全体のものであることを主張している。しかしジャックは「じゃ、そのほら貝でどうしようときみはいうんだ」と、現実には何の成果ももたらさないラーフを嘲笑するだけである。

少年達がおかれた状況は、彼らが連帯に必要な共有目標を持ち続けることが可能な状況ではなかった。そして彼らは、重要ではあるが成果が見え

ない目的を追い続けるリーダーではなく、児童期の喜びを体現し、即物的なよきものを共有させてくれる力ある者を選んだ。平等な連帯を結ぶことができなかった少年たちは、強者とそれに従う従者の関係に墮していき、そして少年たちはそのリーダーに従って「人間性の悪」(Golding)に向かっていったのである。

4. 少年たちはなぜ連帯できたのか —「芽むしり、仔撃ち」の場合—

「蠅の王」が少年たちの連帯の失敗の物語であるのに対し、大江健三郎の「芽むしり、仔撃ち」は、少年の愛と連帯の物語、少年たちによる自由な王国の建設の物語である。但しこの小説は連帯に向かう集団のプロセスや力学を描くというより、主人公と他の少年との個人的交流を描くことが主体の小説で、「蠅の王」ほど集団の連帯の条件が明確ではない。しかし同年代の少年たちが大人から隔離され完全な自治の機会をもった時に、「蠅の王」とは違ったポジティブな方向に向かった事例として取り上げ分析する。

4.1 「芽むしり、仔撃ち」の少年たち

「芽むしり、仔撃ち」の主人公たちは感化院の少年である。「蠅の王」の少年たちと同様、戦争を逃れて山の奥の村へ集団疎開するところから話は始まっている。少年たちがたどり着いた村では疾病がはやり始めていた。疾病の流行を恐れている村の大人たちは、少年たちにたくさんの動物の死骸を埋めさせた。そして少年の一人、村の女と犠牲者がでると、村人たちはばい菌を持っているかもしれない少年たちが来れないように厳重にバリケードをして、隣村へと逃げてしまう。少年たちは疾病の恐怖の中、「孤島」に取り残されてしまうのである。

少年たちの構成は「蠅の王」のように明確には記述されていない。個人として描かれているのは集団のリーダー格の「僕」、 「僕」に無垢の信頼を寄せる「弟」、 「僕」と同様集団をリードする力もち時に「僕」と対立する準リーダー格の「南」、後に集団に加わる朝鮮人の「李少年」の四人、それに母親が疾病で死亡し村に取り残されてしまっ

た「少女」だけである。主人公の「僕」は乳幼児期からの発達において発達課題をクリアーし、基本的活力 (basic virtue)³⁾—希望, 意志, 目的—を十分に身につけて、他者と共に生きていく virtue をもつ少年のように思われる。本稿ではこの問題は論じないが、彼の少年としての成熟性とそこから生じる弟や李との親密な交流は、状況によってはジャックのようになるかもしれない少年「南」からもそのような感情を向けさせている。「芽むしり、仔撃ち」の少年全体の特徴として、大人に頼らず自分たちでやっていこうという自立への志向性を強くもっていることがあげられる。彼らは大人の社会に敵対する目的をもち敵対してきた感化院の少年であり、大人のいない世界で生きていく潜在的な力を備えていた。

4.2 連帯を可能にした状況的、発達の要因

取り残された少年たちがもっている一番大きい欲求は「疾病で死にたくない」という欲求、疾病への恐怖である。その疾病は自分たちが埋めたおびただしい動物たちを死に追いやったものであり、また自分たちの仲間、長いこと共にありつい昨日まで生きていた仲間を物と化してしまったもので、その恐ろしさは少年たちにとって具体的で、緊急性を帯びており、「蠅の王」の漠然とした恐怖とは全く違っている。「蠅の王」では、(彼らは救助されなくても当面はなんとか楽しく暮らせるような) 良好な状況にあるが、こちらは切迫した厳しい事態である。少年たちは脱出しようとするが村人たちに阻まれる。彼らは死なないために死者を埋めねばならず、その作業は協力を必要とし、また仕事の必要性は誰にも明白であるため、さぼる者はいない(主人公はラーフのような嘆きをもたないですむ)。そして少年たちは自分たちと同じ境遇にある朝鮮人の少年にも協力の手をさしのべる。激しいなぐりあいをした相手であるにもかかわらず、彼が重い墓石を動かせないのを見ると少年たちはそれを手伝い、彼らの間に連帯感が生まれる。かれらは疾病が蔓延するという緊急の事態に置かれそれを回避したいという必然的で非常に切実な欲求を共有し、そのために行動に分裂はないのである。

しかもその欲求は村人の悪意で阻まれる。村人たちは彼らを疾病の中におきざりにし、バリケードを築いて彼らを拒絶する。そして一人残された村の少女のために危険を犯して助けを求めにいった主人公の訴えも拒絶される。彼らは少年たちの敵であり、これからもそうあり続けることを厳然と冷酷に示した。少年たちの心の中で共通の強い怒り、恨みの感情がもえあがる。彼らをおびやすなものに対する認識や態度において彼らの間に不一致はない。村人こそが自分たちを恐怖に陥れた元凶であり、決して救ってくれないどころか、もし戻ってくれば今の楽しい生活を破壊する恐ろしい敵である。彼らにははっきりとした共通の敵があった。

少年たちは隔離され恐怖の中にあるが、一方で自由をも手にした。村人たちがいない村を彼らは我がもの顔で略奪する。村の家々をあらし、残された食料をかき集める。貧弱ではあるが彼らは自由な王国を手にいれたのである。自分たちの力で自分たちの生活を維持していくという、生産性にむすびつきやすい明快で単純な目標。彼らもジャックたちと同様狩りをし祭をして児童期的な喜びを満喫する。「蠅の王」の少年たちと違うのは、その楽しい状態を維持することが少年たち全員の共通の目標であることである。楽しく自由に暮らすということは彼らの最も基本的な志向—疾病の回避の努力と相反することもなく(「蠅の王」の場合はそれは救助への欲求と対立してしまった)、その維持が皆の共通目標であり続けることが可能だった。そして第二の違いとして、彼らの場合は食料を得ることや狩りにおいて特定の人に成果が偏ることがなかったことがあげられる。かれらは「生産性」に関して著しい差がなく、「生産性」を一人の人に帰属させなくてすんだ。従って生産性をもたらした者と生産物を授与される者の分化による力関係が生じていなかった。狩の獲物もせいぜいキジで、「頑張ったな」と賞賛を寄せられる程度であり、豚を狩ったジャックのように力を付与されるようなことはなかったのである。

5. 連帯を規定する条件

2つの小説のどちらの少年たちも、突然大人の社会から切り離され、自治の機会をあたえられた。彼らは類似の状況に置かれ同じ発達段階にいる少年たちであるにもかかわらず、一方の少年たちは連帯して「自由な王国」を築き、一方は力の支配に陥ってしまった。なぜそうってしまったのかの分析をおこなってきたが、児童期という発達段階にある少年達の連帯を規定する条件についてまとめてみる。

児童期の認知発達はいくつかの操作期にあり、具体的なことに関しては論理的に考えられる時期である。彼らが注目することは具体的な「今・ここ」であり、長期的なものごとを考えたり、自分の状況をそこを離れ相対化して見ることはまだできない。それができるようになるのは、「今・ここ」を離れて現実とは別の視点（例えば未来や理想）から「現在のあり方」を考えられる青年期である。「蠅の王」では救出に向けてそのような視点が必要とされるが、児童期的な現在だけでなく未来に目を向ける長期的視点を持つラーフたちは、集団から疎外されていく。一方「芽むしり、仔撃ち」では自分たちの「自由な王国」の建設にそのような視点は必要なかった。但し「芽むしり、仔撃ち」でも長期的な広い視点を持つ者が一人登場している。それは脱走した兵士であり、彼は現状を自由と感じている少年たちに「俺も君たちも、まだ自由じゃない。俺たちは閉じ込められている」と言う。自分が置かれた状況をその内側から、今という視点からしか見ない少年たちに、脱走兵はその状況が閉塞的なものにすぎないこと、国が降伏し戦争が終わった時初めて自由になるのだと説く。しかし自分たちの自由な王国を建設した少年たちは、(ジャックがラーフを嘲笑したように)「大人になった奴、大人になりかけの奴は始末におえない」と脱走兵を嘲笑するだけであり、外的社会から遮断されてのみ成立する自分たちの王国の閉鎖性や限界に気づかない。彼らの王国は戻ってきた村人たちによって脆くも壊され連帯は解体してしまう(少年達の連帯は一時的なものにすぎなかつたのである)。「今」「ここ」しか見ることができない少年達が持続する確固とした連帯を作るとはむずかしいと思われる。しかし短期間であったとしても連帯できた「芽むしり、仔撃ち」の少年たちはよき仲間関係を築き、一方連帯に失敗した「蠅の王」の少年達は殺し合いになってしまうのである。

同じ発達段階にあるにもかかわらず「芽むしり、仔撃ち」の少年たちだけが連帯できた理由をまとめると次のようにいえよう。第一に彼らをめぐる状況全体が連帯を作りやすいものだったこと、第二は彼らの資質、自我の成熟性である。第一の点に関しては、集団の目標あるいはそれを阻む敵や彼らが遂行する作業が次の条件を満たすような状況であった。1)課題の認知的水準の適切性。少年たちは自分たちが何を望んでいるのか、それを阻むのは何なのかははっきりわかった。集団の目標は具体的、短期的視点しかもてない少年たちにも見えるもので、彼らに直接的に、切実に訴えるものだった。疾病という敵がいかに恐ろしいものなのか、その恐ろしさを彼らは実感できたし、もう一つの敵である村人の卑劣さも明確で、誰もが強い怒りを感じていた。2)課題の共有性。少年たち全員にとって集団の目標が自分の目標であり、皆の敵が自分の敵であった。彼らは緊急の事態に置かれ、それを回避したいという必然的で非常に切実な欲求を共有し、そのために目標と敵を完全に共有していた。3)生産性とながかりやすく見えやすい成果。行動することによるフィードバックが得やすく、生産性とながかりやすい課題だった。死体を埋めるという作業、日々の糧を得る作業、村人との戦い、どれもやったことの成果が自分たちに実感できる作業だった。従って少年たちに訴える力をもち、また目標を維持することが可能だった。4)協力必要性。それらの課題は一人でなされる課題でなく、協力し相互に助け合い補い合うことによって達成される課題であった。

以上の状況的要因に加えて第二の要因、次のような集団の成員の資質が関与している。5)集団の成員、特にリーダーの自我の成熟度。リーダーの主人公は前節でも述べたように乳幼児期からの発

達した。以上のように、少年達の連帯は、彼らの資質、自我の成熟性、そして状況的要因の相互作用によって規定される。以上を踏まえて、少年達の連帯を規定する条件についてまとめてみる。

達課題をクリアし、基本的活力を十分に身につけており、少年として成熟した自我をもつ少年であった。6) 自立の経験とそれへの志向性の強さ。「芽むしり、仔撃ち」の少年たちは、大人社会に敵対する目的をもち敵対してきた感化院の少年であり、大人に頼らず自分たちでやっていこうという志向性とそのためのスキルをもっていた。「蠅の王」の少年たちが、それまで大人に従って生きてきた少年たちで、肉体的にも精神的にもひよわな少年であるのに対し、そうせざるをえない状況に置かれ受動的にそうなったにすぎないにしても、彼らは結果的に大人のいない世界で、指導・統制されなくて生きていく力を備えていた。そして少年たちの置かれた状況および目指す目標—救助を待つという大人への依存と、大人を排除するという目標—もその傾向を更に強めるように働いたのである。

以上のように、少年がその時置かれている状況—携わっている課題の問題として1) 課題の認知的水準の適切性、2) 課題の共有性、3) 成果のわかりやすさ、4) 協力必要性が抽出され、また少年がそれまで置かれてきた状況の中で培われてきた乳幼児期からの育ちの問題として、5) 集団、特にリーダーの自我の成熟度、6) 自立の経験とそれへの志向性の強さが抽出された。そのような状況要因と少年のもつ傾向が組み合わさって、連帯を可能にしたと考えられる。

6. 大人の役割

大人から全く離れて集団活動を行なうことになった少年たちを描く二つの小説を分析し、連帯を規定する条件を考察してきたが、では連帯が不可能だった「蠅の王」の場合大人からのどのような援助があればよかったのかの問いを通して、少年の集団活動に大人が果たす役割、生産性の経験を連帯につなげていくための大人による援助について考察する。

「芽むしり、仔撃ち」では大人がいなくても適切な集団活動が行なわれており、少年達の連帯には必ずしも大人の実在は必要ではないことが示されている。しかしそれは少年たちが彼らの発達水

準でも連帯が可能な状況に置かれていたためであり、状況によっては「蠅の王」のようになってしまう可能性もあった。例えば少年たちの目的がぐいちがってしまったら、彼らは民主的に話し合うことなく分裂してしまっただろう。事実彼らは一度分裂の危機に曝されているが、その危機は集団の力ではなく外的要因によって避けられている。「蠅の王」の場合は、少年達は本質的な目的に向かって連帯するのが困難な状況に置かれていた。そのような状況では状況を適切なものに変換し補う大人が必要とされる。

連帯を可能にする直接的な方法として、状況そのものを前章で述べた連帯のための条件にあうように変えることが考えられる。例えば彼らの認知水準にあった目標や共有が可能な目標を導入する、協力し相互に助け合うことが必要であるような集団の課題をつけ加える等、目標が十分に理解・自覚化でき、目標実現の過程で目標に近づいているというフィードバックを得ることができれば彼らは自発的に目標実現に向かうし、その目標が他者との協力を要請するものであれば連帯も可能になる。また「蠅の王」のように生産性に直接結びつかない作業（救助される目標のために煙を出し続ける作業）が集団の目標達成に必要である場合は、大人が別の次元のフィードバック（例えば成果がなくてもやり続けていることへの賞賛・励まし）を与えたり、あるいは彼らが何を目指しているのか目標達成の意味と、それに向けて現在の作業がどのような意味をもっているのか、わかりやすく根気よく語ることによって、やる気を維持させることが必要である。学習の動機づけとして、内発的動機づけだけでなく外から与えられる広義の外発的動機づけ（意義や目標の教示、結果に対する承認等）の重要性も指摘されているが⁶⁾、少年達もそのような援助を他者・大人から受けることにより、行為そのものの効果のなさ（非生産性）に耐えて、遠い目標に向かって作業を続けることができると思われる。

現代の少年たちはかつての少年たちに比べ仲間との連帯をもてないことが指摘されている。それは現代の状況が、連帯の条件を備えた「芽むし

り、仔撃ち」の状況とは程遠く、「蠅の王」に近いと思われる。何もしなくても一定程度楽しく過ごせる一般的状況の良好さ。皆で協力して初めて達成されるような、しかも必然的で切実な共有目的をもてない状況。また自分たちをおびやかす誰の目にもはっきりした強力な敵も見えない。そして自分が置かれている状況がつかみにくく、自分たちが目指す本来の目標が何なのか見えないし、自分が目標に向かって確かに進んでいるという実感ももちにくい現代社会の少年たち。かつての少年たちのように自分たちの力、自発性によって連帯をもてる状況にない彼らに対し、大人は連帯できる状況になるよう補い、連帯に向かう彼らを支え、励ますような働きかけを行なう必要がある。

更に適切な目標に向かう連帯を可能にするために、少年達の相互作用が適切なものになるような援助をすることも必要である。第一に話し合いの場を確保するように働きかけねばならない。「蠅の王」では当初はほら貝は特殊な力をもっていた。情勢が変わってきてジャックが力を持ち始めても、その力は話し合いを破壊したり無化したりする程のものではなく、ラーフたちは自分たちの正当性を皆に納得させる機会をもっていた。しかしラーフの説得力のない不十分な発言のために少年たちの心は決定的にラーフから離れ、それ以後理性的な話し合いの機会は失われてしまう。このような時大人がラーフの意見を取り上げ支えることが必要であろう。集団の大勢に流されることなく、少数の意見も取り上げられ、理性的な話し合いにより合理的で正当な決定がなされるように配慮されねばならない。

第二に少年たちに彼らが置かれている状況を正しく理解させ、どう対処していったらいいのかを状況認識に基づいて考えさせることが必要である。短期的で狭い視点からしか状況を把握できない少年に対し、彼らの考え方の不十分な点、欠点に気づかせ、状況とこれから向かうべき目的をより高い認知水準でとらえることができるように導くのである。「蠅の王」の場合はラーフとピギーが状況を高い水準でとらえていた。しかし彼らは

自分たちの考えを少年たちに伝えることができず、そのために少年たちの心が離れてしまうのである。このような場合大人はラーフたちの考え方を明確化・補足し、彼らが自分の考えを十分に説明できるように援助することが必要である。「芽むしり、仔撃ち」の場合連帯が達成されるが、その連帯は強圧的な外的社会によってあつという間に解体させられてしまうという限界があった。自分たちが置かれた状況をより広い枠組みから眺めることによりもたれる、集団内の仲間だけでなく外にまで広がりうる連帯、より大きな社会でも持ち続けることが可能な連帯ではなかった。そのような連帯を作るためには、少年たちの自治能力に任せておくだけでなく、大人が少年の目を社会に向けさせ、社会科学的な視点を示すことが必要と考えられる。

Kohlberg は道徳的発達を促すためには、様々な視点や考え方に触れて自分の考え方の矛盾に気づき認知的葛藤を経験することが必要だとし、その具体的方法としてグループで討論する道徳教育のプログラムを提唱している¹⁹⁾。そこにおける教師の役割として1)誰もが自由に発言できるような雰囲気を作り、討論を保証し活性化すること、2)各自の考え方を明確化することを促し、不十分な点に気づかせること、3)より高いレベルの考え方がでてきた時に、それを取り上げ注目させること等があげられている。大人の援助なしでも、そのような話し合いや経験がなされる場合もあるが、自由で平等な関係を維持し、また少数者も持つ高いレベルの考え方も取り入れて、よりよい連帯を作っていくためには、大人の援助が必要になることも多いと思われる。

以上のように本稿では、少年達の連帯を描いた対照的な2つの小説を分析することにより、どのような状況下においてそれが可能になるのか、その条件について考察を行った。その結果、少年が置かれている状況が協力を必要としていること、携わっている課題が彼らに適切であること、少年の資質等が関与していることが示された。これらの結果は現実の事例から導かれたものではないし、文化的背景が異なる少年達の比較であるとい

う限界はあるが、発達心理学や教育心理学ではまだ分析されることのない「児童期の連帯の条件」を、2人のノーベル賞作家の洞察から整合的に導き出すことができたといえる。更に上記の条件と関連させて、それらが不十分な状況下で連帯できるようにするために、大人はどのように援助していけるのかについての考察も行った。

注

〈注1〉 連帯感は社会学では重要なテーマであり、例えば Hechter は社会学の観点から連帯の条件についての分析をしている⁷⁾。しかしそれは大きな社会における大人の連帯であり、本稿でとりあげる児童期の小さな連帯とは異なっている。一方心理学辞典や教育学辞典には「連帯」や「連帯感」の項目は見られないものが多く、7冊中2冊にのみ見られた（「共通の利害、責任等から生じる諸個人間の相互依存関係、団結、結束」⁹⁾「外的な圧力や強制力によらずに自発的な力によって結集し、共通の目標に向かって努力を分かち合い、命運を共にしているとの認知に基づいて他者あるいは集団全体に対してもつ親近感を伴う一体感」¹¹⁾）。本稿の立場はこれらに近い。

〈注2〉 児童期にあるのは少年だけではないが、Erikson 理論は基本的に男子についての理論であり、生産性課題は男子によりあてはまり、女子は児童期においても「達成」よりも対人的な「関係性」がより重要なことが指摘されている (Gilligan, C., 1982)⁴⁾。本稿でとりあげる小説も少年をめぐるものなので、以後「少年」と表記することとする。どちらの小説でも、登場人物の年齢は具体的に記述されず「少年」と表記されることが多いが、必ずしも同年齢ではないものの、比較的年齢が近い異年齢集団と思われる。

引用文献

- 1) Bandura, A. (1997) 激動社会の中の自己効力. 本明寛・野口京子監訳, 東京, 金子書房. (原著は1995)
- 2) Eisenberg, N. & Mussen, P. H. (1991) 思いやり行動の発達心理. 菊池章夫・二宮克美訳, 東京, 金子書房. (原著は1989)
- 3) Erikson, E. H. (1973) 自我同一性. 小此木啓吾訳編, 東京, 誠信書房. (原著は1959)
- 4) Gilligan, C. (1986) もう一つの声. 岩男寿美子監訳, 東京, 川島書店. (原著は1982)
- 5) Golding, W. (1975) 蠅の王. 平井正穂訳, 東京, 新潮社. (原著は1954)
- 6) 速水敏彦 (2000) 私の動機づけ研究における2つの発達の視点. 小嶋秀夫他編 人間発達と心理学. 東京, 金子書房, 59-66.
- 7) Hechter, M. (2003) 連帯の条件. 小林淳一・木村邦博・平田陽訳, 京都, ミネルヴァ書房. (原著は1987)
- 8) Hoffman, M. L. (1984) Empathy, its limitations, and its role in a comprehensive moral theory. In Kurtines, W. M., & Gewirtz, J. L. (Eds.) *Morality, moral behavior, and moral development*. New York, Wiley, 283-302.
- 9) 岸本 弘, 滝沢武久編 (1985) 教育心理学用語辞典. 東京, 学文社, 198-199.
- 10) Kohlberg, L. (1984) *Essays in Moral Development vol-2: The Psychology of Moral Development*. San Francisco, Harper & Row.
- 11) 三宅和夫, 北尾倫彦, 小嶋秀夫編 (1991) 教育心理学用語辞典. 東京, 有斐閣, 340.
- 12) 大江健三郎 (1958) 芽むしり, 仔撃ち. 群像 (大江健三郎集 (1969) 東京, 新潮社.)
- 13) Peterson, C., Maier, S. E., & Seligman, M. E. P. (1993) 学習性無力感. 津田彰監訳, 二瓶社. (原著は1992)
- 14) Piaget, J. (1957) 児童臨床心理学Ⅲ 児童道徳判断の発達. 大伴 茂訳, 東京, 同文書院. (原著は1930)
- 15) Piaget, J., Erikson, E. H. 遊びと発達の心理学 赤塚徳郎・森彬監訳, 東京, 黎明書房. (原著は1978)
- 16) Power, C. & Higgins, A. (1992) 正義的共同社会理論. 大西頼子訳, 日本道徳性心理学研究会編, 道徳性心理学. 京都, 北大路書房, 70-114.
- 17) 白井利明 (1997) 時間的展望の生涯発達心理学. 東京, 頸草書房.
- 18) 高田利武 (1991) 社会的比較—その発達過程—. 三隅二不二・木下富雄編, 現代社会心理学の発展Ⅱ 京都, ナカニシヤ出版.
- 19) 山岸明子 (1985) 道徳性の発達と教育—認知発達

理論からのアプローチ. *生活指導*, 27-11, 83-95.

- 20) 山岸明子 (1988) 幼児期の自我発達—遊びにおける対物的主体感を中心に—. *教育学研究*, 55-4, 329-337.

(平成18年10月11日 受付)
(平成19年1月9日 受理)